

平成19年
2月号
250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌

「普遍的な良心とは、海に似ています。嘘がその真ん中まで流れ込んでいったとしても、海はやはりそれらを集め、海岸に放り出すのです。」p.3



嘘

地上の後継者

信頼できるということ

痛みのない愛

プランクトン～食物連鎖の基盤

『THE 有頂天ホテル』



あるテレビ番組のねつ造事件が大問題に発展してきています。テレビというメディアの役割や影響力を鑑みて全く許されることではありませんが、視聴率を気にするのか番組作りで苦境に陥るのか、同じようなねつ造は時折発生しています。データの改ざんや事実の歪曲などの虚偽がいても簡単に、繰り返し行われていたというような様々な事実が明るみに出るとつれ、外側から見ている私たちは制作に携わる人々のモラルの低さや自分たちが騙されていたことに驚きや怒りを抱かざるを得ません。

では、あなたは嘘についてはいませんか。

つい先日、私はぐずっている子供の気をそらそうとあることないことを話していました。そして近くにいた人に指摘されたのです。嘘を言ったでしょ、嘘は嘘ですよ、と。正直なところ戸惑いました。嘘を言っているつもりは全くなかったのです。子供の気をそらそうとしていただけだと・・・

こうして自分の話す言葉を振り返ると、無意識のうちに、子供だから分からないだろうとたかをくくっていたのかもしれない。過去には話を面白くしようと少し内容を脚色したこともあります。もし人から「嘘吐き」と言われたらひとかたならぬ衝撃や拒否感を覚えるでしょう。しかし実際はたとえ小さなことであれ嘘を言っていたのです。自分自身の舌が繰り出す言葉にいかにも無責任になっていたことでしょうか。

番組ねつ造事件は誰が見ても受け入れがたい嘘、信頼を失う出来事でした。そして嘘が嘘を呼ぶという典型的な例でした。大きな嘘は突然生まれるものではありません。小さな嘘が積もり積もって、嘘を嘘とも思わない鈍感さが生まれ、その延長に発生するのです。「嘘つきにならない場合は人々の仲裁をする時と良いことを言う時と良いことを言い広める時である」という言葉があります。しかし自分自身を貶める嘘、周りを欺く嘘は大小を問わず侮るべきではないでしょう。



編集部より	2
嘘	3
祈りのある毎日へ	4
チーズケーキ	4
地上の後継者	5
信頼できるということ	8
痛みのない愛	12
年老いた人々へのメッセージ	17
プランクトン～食物連鎖の基盤	21
感謝しない人間	24
『THE 有頂天ホテル』	25
誠実に生きること	28



嘘は不信心者の言葉です。それは、この世において、人々が遅かれ早かれそれに気づくことにより、その人の価値を失わせませす。あの世においては、その人を地獄へと追いやるものです。

嘘はへつらい、真実は真剣で無欲。

嘘はくだらないおしゃべりのようで、浮ついたもの。真実は厳肅で、雄大。

嘘、策略、窃盗、中傷が広まっている国家は荒廃していて、人々は困窮し、軍隊はクーデターを起こす機会を狙っているものです。

嘘つきというものは、どのような衣装で身を包もうと、自らを人々の良心から隠すことはできません。まして、主の光によってもものを見る、知性のひらめきの持ち主の目からは。

嘘が需要を持ち、周囲がそれによってうめき続けているなら、真実は言葉を失ったということなのです。

普遍的な良心とは、海に似ています。嘘がその真ん中まで流れ込んでいったとしても、海はやはりそれらを集め、海岸に放り出すのです。

嘘や教えへの否定、教えの歪曲、偽善の顔に唾棄し、それらを常に非難するものがあるとするなら、それこそが良心なのです。

嘘や見せかけは騒々しく、真実や誠実さは静かです。星は雷よりも早く、目的地へ達するのです。



ドゥア（祈り）のある毎日へ

偉大な者の中で最も偉大なお方よ

寛大な者の中で最も寛大なお方よ

慈悲深き者の中で、最も慈悲深きお方よ

統治者の中で最もすばらしい統治者よ

知るものの中で最もよく知るお方よ

永遠なる時を越え存在する、初めのお方

最も偉大なお方よ

壮嚴なるものの中で最も美しいお方よ

強力な者の中で最も強力なお方よ

情愛細やかな者の中で最も情細やかなお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。*



レシピコーナー

チーズケーキ

材料：クリームチーズ 250g（1箱）

生クリーム 1パック

卵 2個

砂糖 大さじ6

レモン汁 大さじ2

小麦粉 大さじ2

作り方：

1. クリームチーズはやわらかくしておく。
2. ミキサーに材料全てを入れてミキサーにかける。
3. よく混ぜ合わせり生地がなめらかになったら型に流し込む。

170℃のオーブンで40分ほど焼いたら出来上がり

*偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



真の軌道に向かって回転しながら漂っているこの世界・・・正当な「地上の後継者たち」はかつてその手から奪い取られた継承物を取り戻し、復興させる準備ができていますでしょうか。最初の権利は贈り物として授与されるものであり、努力や行動によって得られる権利とは異なっています。当初はある特定のグループや組織、国家に与えられたとしても、いつ取り消されてもおかしくはありません。さらには正真正銘の適格者の誕生が待たれる間、比較的優れている価値ある人々の間で所有者が次々と変わっていくこともありえます。

『われは（ムーサー）に訓戒を受けた後、詩篇の中に、「本当にこの大地は、われの正しいしもべがこれを継ぐ。」と記した。』（クルアーン 預言者章 21：105）

この節で宣誓され保証されている約束がいつの日か履行されることに疑問の余地はありません。また継承されるのが地球だけではないことも確かです。なぜなら地球を継承することは空や宇宙にある資源を管理しやり繰りすることを意味するからです。全宇宙の「支配」といっても過言ではないでしょう。この支配は神に代わって摂政もしくは管財人に委託されるものですが、地球と天を後継するに相応しい特性と一致していることが非常に重要であり、まさに不可欠となります。この必要とされる特性が実現のものとなり実践されさえすれば希望は叶うのですが・・・

歴史上の混沌とした時代、後継者たりうる正当な資格を持ちながら、この素晴らしい相続を担うのに必要な義務を果たしえなかった人々は、支配を実行する真の所有者によってその相続権を取り上げられていました。つまりそのような喪失を免れたければ真の所有者に立ち返り、その保護を求めて服従するしか方法がないのです。

神はこの相続を特定の一族や部族、民族、人種に約束したわけではありませんでした。相続は次のような特性を持つ神の僕に対して開かれていました。すなわち思想や宗教が正しく、預言者ムハンマドの精神そしてコーランに基づく徳を備えている者。結束、調和、共生そして連帯の理念を促進し保持する者。その時代の情勢を把握している者。科学と知識を身につけている者。常に現世と来世のバランスを保ち、それを守る者。つまり相続は、預言者性の天空を飾る星のような存在である教友たちも歩んだ行路を切望する、精神、精神的現実、精神的ビジョンの英雄たちのためにあるのです。そしてこの相続は神の慣行に従って、神によって処置されるものなのです。

「それであなたは、アッラーの慣行には代替がないことが分るのであろう。また変更も決してないことも分るのであろう。（クルアーン 創造者章 35：43）」という節に照らして、これは自然の法則かつ創造主が定めた創造の法則であり、不変であることが分かります。

だからこそ、地球上の後継者となるには何をにおいてもクルアーンとスンナにのっとって宗教を生き邁進することが条件となるわけです。地上の後継者となることは第二に、宗教を人生の要とすべく奮闘するこ

とも意味します。第三に、その時代を代表する科学と知識の継承者に値することも条件となります。決して見落としてはならない点は、宇宙をつかさどる自然の法則（宇宙にあまねく神意と神通力の顕現）と神の掟（神の属性である「カラム」－人類に語りかけること－に由来する聖典に明示されているような）に従わなかった者に罰が下されるのは必至であるということです。この懲罰は精神的な生き方においてマイナス方向の変化を被った者に対しても下されます。それはたとえその時点で他の者を支配下におく統治権を享受してしたとしてもです。以上に述べたことが理由で衰退し消滅していった国家の数々が眠る墓地とでも喩えられる歴史がその事実を証明しています。社会や国家が生き方や精神世界を変えたりしない限り、そしてそれらが自身や魂、その本質を歪ませたりしない限り、神がそれらに付与した恵みを奪ったり変化させたりすることはありえません。既述の節や次の「本当にアッラーは、人が自ら変えない限り、決して人びと（の運命）を変えられない。（クルアーン 雷電章 13：11）」という節、これらは支配と被支配、恩恵と屈辱に関わることで、我々に重大な原則を思い起こさせると同時に現代ムスリムが陥っている失敗についても浮き彫りにしています。

この失敗については、内部構造（心と魂）にゆがみを生じ、そして外部構造でもゆがみを生じている（つまり最新知識で後れを取っている）ことだと集約することができます。これが過去200年間にわたって外部世界から押し付けられた障害や妨害によるものか、自分自身の無知、弱さ、無力さ、欠陥から起因しているものなのかはそれほど重要ではありません。ひとつ確実なのは、イスラーム社会は、自身を長い間揺らぐことなく保持させ正当な「地球上の後継者」たらしめた力の源に対する興味の欠如、無関心のせいで血を失いつつあるということです。

かような不幸続きの時代にムスリム社会の総代としてイスラームを代表していると主張する人々について、イスラーム初期のムスリムたちが行っていたような心と魂を込めた高尚な生き方をしていることができるでしょうか。ムスリムたちは、自らの生き永らえたいという望みを二の次にしても他人を生かそうとする願い、崇高な決意を持っているといえるでしょうか。さらに付け加えると、己の行いがより気高く有意義で有益な物事、状況につながるか、もしくは破壊につながるかを意識しながら暮らしている人を何人挙げることができるでしょうか。侮辱を受けながら生き永らえるよりは名誉ある死を選ぶ誠実な人を何人挙げることができるでしょうか。目の前に立ちはだかる敵や障害物による苦難に屈することなく、進路変更や方向転換もせずに生き続けてきた輝く魂をいくつ示すことができるでしょうか。

そのような不幸続きの時代、政権や統治者が露呈した弱さには文字通り胸が張り裂けるような思いをさせられます。クルアーンはムスリムたちが専制君主の支配下に生きることを禁じていますが、不幸にも我々は、その状態から自分自身を救えないでいるのです。

我々は許されざる歴史の過ちを犯してしまった、というのが事態の真相なのです。この世界を物質的に豊かな場所とするために我々は自らの宗教を犠牲にし、宗教よりもこの世の中が好ましいとするような思考様式を採用してしまったのです。その結果、我々は宗教を喪失するのみならず、世界を手にもすることに失敗してしまいました。この栄光ある、しかし不運な国家は、空洞の時代を味わいました。神に祝福された歴史や千年の遺産は退けられました。形だけででっ上げの素性が人々に押し付けられました。偉大

な国家は、永続的価値を持たない思い上がりの信条でできたブロックの上に設計し直されました。歴史、共同体と文化のつながり、家系、そして国の文化と遺産は嫌われ、侮辱され、馬鹿にされました。千年の間我々の思考様式に敵対してきた人々のもとに身を寄せ、彼らの思想にすがりました。このことによってその思想は極めて俗悪な思考と下品な表現に伴われてわが国に流入してきたのです。散文や詩の中でこういった事柄を巧みに表現し称賛した者たちはいくつもの賞を受賞できました。不当に扱われ非難と抑圧を受けた人々の世界で、感性や思考、道徳に共産主義を持ち込もうとまでしたのです。

社会主義や共産主義などのイデオロギーが全盛を極めていた頃、不信仰によって全くの無能者となったかなりの人数の団がいたことが今でも記憶によみがえります。彼らは自分自身さえも信じることができず、低俗なやり方で宗教や聖なるものを攻撃するために常に有名人やドグマ、イデオロギーを盾に取る必要性に迫られているような人々でした。現在でも全く同じ人物や集団によって、同様の実に見苦しい、不快な活動がなされているのです。いまだに以前と同じ不法なイデオロギーを根拠にし、またその後ろ盾を得て、彼らは憎悪や悪意を撒き散らし、敬虔で宗教的な人々の口を封じて宗教的な生活を止めさせようとして戦争に訴えんばかりです。トルコ共和国国歌の作詞者でもある、トルコの詩人として名高いメフメト・アーキフ・エルソイ（1873-1936）は、彼の詩集「Safahat（段階）」の中で心底の悔しさや精神的苦痛といったトーンでこの問題を取り扱っています。ムスリムとイスラームが監視下に置かれ、追跡や迫害を受け、起訴された時代。また宗教に対する愛情や愛着、熱意が侮辱され殲滅された時代。こういった暗黒の時代について実に印象的に表現しています。

しかしながらこの気高い国家について指摘しなければならない点があります。多年にわたって否応なしに冒濫的で専制的な圧制を強いられてきてはいましたが、完全に押さえ込まれたわけではなく、思考面における永遠の生命への強い憧れも失われてはいません。これらの思考は、かき混ぜるとパチパチと勢よく火花を散らす赤熱した燃えさしであり、また同時に世界を照らすことのできる光の源でもあります。これまでは慎重さや将来への配慮、冷静さという求心力が働いて規模を縮小させ、一粒の種に収まる大きさになっていたのかもしれませんが。ですがそれゆえにその種は世紀のこの上なく悲惨な日々を生き抜き、その目的を成就する水平線の彼方に必死に向かい、機が満ちたときに世界中を啓発するための準備を整えながら待つことができたのです。

我々は、長く続いた荒廃を、苦難に耐え努力をなした年月としてみなすべきです。イスラームを理解することによって、そして高潔な僕たちと行動を共にすることによって、今一度、我々が地球の後継者であることを証明していきましょう。イスラームを理解すること、それはその真髄に応じて我々の物的・精神的復興に十分な力を与える源であります。また高潔な僕たちとは健全で強い感情や思考、知力、意識、そして意志を持ち、神の言葉通りに生き、神の言葉を人々に伝えていこうという考えを貫く気高い人々です。彼らはまた、知識の獲得を系統立てて行い、信頼するに足る仕事ぶりや態度を示し、高潔な性格を備えています。加えて肉体的な欲望に屈することはなく、心と頭を一致させるよう努力してきた人々です。

神が我々を導き成功を与えてくださるのなら、かつて失われた道に向かって我々の旅を続けていきたいと思うのです。



信頼できるということ*

誠実さへの導き

預言者ムハンマドは、アッラーからもたらされたメッセージを誠実に守ったのと同様に、この誠実さを全ての存在に対して示された。そして、ウンマ（預言者の共同体）をも、同じ品性へと導かれたのである。預言者ムハンマドは彼らに、誰に対しても誠実に振る舞うことを勧められた。裏切りなどは考えられないことであり、陰口も禁止された。預言者ムハンマドはすぐにその者を叱られ、その心に陰口のちりをためることを決して許されなかった。

「誰その奥さんの背はなんて高いのでしょうか」と言ったアーイシャに「彼女の陰口を言って、傷つけた」[†]と言われたこと、教友たちが陰口を言った時にも同じようにお叱りになったこと[‡]、これらは皆、預言者ムハンマドが誠実な人であり、信頼に満ちた雰



囲気が他の者の心にも安心を与えるであろうためであった。

預言者ムハンマド御自身は、常に次のようなお祈りをされ、またウンマにも勧められていた。「アッラーよ、ひもじさからあなたに庇護を求めます。それは悪い友のようです。裏切りからも、あなたに保護を求めます。それは、悪い腹心の友のようです」[§]

信託を守ることが重要であるのと同じくらいに、背信行為を行なわないことも重要である。そもそもこれらはお互いにお互いの欠かせない要素である。

約束を守らない、結果として裏切り行為を行なう者について、預言者が語られた恐ろしい言葉がある。「アッラーは、最後の審判の日、全ての人間を集められ、全ての不誠実な者たちについて旗を立てられ、誰その息子誰その不誠実さはこのようであった、と示されるであろう」^{**}

預言者ムハンマドは、全ての悪に対して閉ざされ、封印された魂の持ち主であった。良い行いに対

* この文章は“Prophet Muhammad: Aspects of His Life・1”よりの訳です。

† Ibn Kathir, Tafsir 7/359; al-Tarqhib ve l-Tarhib 4/285

‡ Muslim, Hudud 22, 23

§ Abu Dawud, Witr 32; Nasa'i, Isti'adha 19,20; Ibn Maja, At'imah 53

** Muslim, Jihad 9

しては、ほんのささいなことであろうと心を開かれ、常に良い意識で持つて振る舞われた。このお方はその人生を常に誠実さの中で過ごした。人々も信頼し、従った。背を向けた者たちは皆が誤った道に進み、その道で迷った。しかし預言者ムハンマドは常に守護天使のように人々のそばにおられ、誰であれ、どういう状況のもとであれ、その扉を開く者は「どうぞ」と言うこのお方の声を聞いたのであった。

預言者ムハンマド自身は、アッラーを信頼し、従っていた。アッラーを信頼し、従うことは、すなわち信託が預言者からアッラーへと昇華されるということである。信託は、アッラーから預言者たちにもたらされ、それはアッラーへの信頼、従順という形で預言者たちに現れるのである。

全ての預言者たちは、アッラーを信頼する者として遣わされた。これは彼らからは切り離せない、気高い特質の一つである。聖クルアーンはそれをはっきりした形で我々に示している。

「彼らにヌーフ(ノア)の物語を誦読しなさい。彼がその民にこう言った時を思え。『私の人々よ。私があなた方と一緒にとどまり、またアッラーの印を思い出させることが迷惑であっても、私はアッラーを信頼する。それであなた方は、自分で立てた神々と相談してあなた方のことを決定しなさい。それであなた方の決断に、半信半疑であってはならない。その時、私に対する態度を決め、猶予するな』(ユースス章10/71)



聖ヌーフはアッラーを信頼し、従い、彼に対抗する集団に「あなた方と共にとどまり、アッラーの印を思い出させることがあなた方にとって迷惑なら、好きなようにしなさい。あなた方はあなた方であり、私は私である。あなた方は集団であり、私はたった一人である。しかし、アッラーは、あなた方に対して私を無力な者とはなされないであろう。あなた方は皆一緒になって、相談し、私に対してどうとでも好きなようにしなさい。それを実行する時は、皆で協力し、助け合いなさい。後になって問題が残ったり、あんなこともすればよかった、と後悔したりすることのないように、できる限りのことをしなさい。思いついたことは何でも実行しなさい。今私はあなた方の行動を待っているのだ。さあ来なさい！」と言っているのである。ヌーフは、これらを言う時、アッラーに対して途方もないほどの信頼と服従の精神の中にいる。彼はアッラーが彼を守られることを確信していたのだ。彼の箱舟にどれほどの人が乗ったのか、我々は知ることはできないが、明らかなことは、聖イブラーヒームを含めて多くの預言者たちがその血統から誕生したということである。

聖クルアーンでも、イブラーヒームをヌーフの民とし、次のように述べている。

「また彼の後継者の中にはイブラーヒームがいた」(整列者章37/83)

「彼は答えて言った。『私は立証をアッラーにお願いする。あなた方も、私が神々を配することに何の関わりもないことを証言してください。彼以外(の神々を仲間として)、皆で私に対し策謀しなさい。』

何も猶予はいらない。私の主であり、あなた方の主であられるアッラーを私は信頼する。全ての生き物の一つでも、アッラーが、その前髪をつかまれないことはない。本当に私の主は、正しい道の上におられる』(フード章11/54~56)

イブラーヒームの、アッラーに対する服従のあり方は、次の節で明らかにされている。

「イブラーヒームや彼と共にいた者たちのことで、あなた方のために本当に良い模範がある。彼らが自分の人々に言った時を思い出せ。『本当に私たちは、あなた方とあなた方がアッラーを差し置いて崇拝するものとは、何の関わりもない。あなた方と絶縁する。私たちとあなた方の関係には、あなた方がアッラーだけを信じるようになるまで、永遠の敵意と憎悪があるばかりである』イブラーヒームは父親だけにはこう言った。『私はあなたのために、お赦しを祈りましょう。だが私はあなたのためになるどんな力もアッラーから頂けないでしょう』彼は祈った。『主よ、私はあなたにおすがり申し、あなたにだけ悔悟します。私たちの行き着くところは、あなたの御許ばかりです』(諮問される女章60/4)

そう、イブラーヒームと、彼と共にいた者たちも、その敵に立ち向かっているのである。「私たちは」と言う「あなた方がアッラーを差し置いて崇拝するものとは何の関わりもない。私たちはそれを全て完全に否定する。我々の中の敵意は増長されるばかりである」。そもそもこの敵意は、聖アードムの時代から続くものである。信仰と憎悪は、その最初の日から敵なのである。同じ空間を共有することは不可能である。だから、当然として、憎悪は信仰に対抗する。その目が光に慣れていないために、信仰と、預言者たちがもたらす光から苦しめられているように感じるのである。「あなた方が私たちのようにアッラーを信じ、従わない限り、この敵意は永遠である」



なぜならこの憎悪は過ちだらうからである。信仰を拒否する者は、存在に対して敵意を込めたまなざしを持つ。信者の心には温かみと人間性がある。彼は世界の全てを兄弟とみなし、皆と一つになり、対話できる道を探す。しかし、信仰を拒否する者は、皆と競い合うことを好む。もし皆がアッラーを信仰し、心から信じきった時には、平安と平和が訪れるであろう。これらを不信心者から、あるいはその憎悪から期待するのは、余りにもものんき過ぎることである。民族が互いに首を締め合うこと以外に、この憎悪が人間に与えるものは何もないからである。

だから、信者と不信心者の間に、真の意味での会話は成り立たない。そのため、聖クルアーンでは、イブラーヒームがその父親に語った言葉を述懐^{じよつがい}しているのである。彼の言葉はただの希望であり、それは彼の深い悲しみの中から出てきたものである。彼も、父親のためになるどんな力も、アッラーから頂けないであろうことを明らかにしている。そしてそれに続けて「あなたにだけおすがりします」と言い、アッラーに対する信頼と服従、従順を示しているのである。

全ての預言者の人生が研究されれば、彼らのアッラーに対する信頼と服従が非常に重いものであったことが明らかになるであろう。彼らの服従は、普通の人間の信頼や服従とは全く違うものである。特に預言者ムハンマドのそれは、他の全ての預言者のものよりさらに深いものであった。



アッラーは、ある時預言者ムハンマドに「ハスビヤッラー」（私にはアッラーがいれば十分である）という言葉を教えられた。預言者ムハンマドは、生涯を通して、アッラーに対して服従、従順、信頼の精神をもって生きたのである。聖アリーのような勇者でさえ、次のように言っていることを考えるべきであろう。「私たちは、戦いで苦しい立場に立ち、心の中に恐怖が生まれた時には、すぐに預言者ムハンマドの後ろに避難し、心の平安と信頼を得たものである」^{*}

アシュラー(ノアのブディング)の物語

これは何千年も昔の話、アードムさまの千年あとの話です。

神様は、その慈悲によって、人々のためにヌーフさま（ノアさま）を遣わされました。

ヌーフさまは、彼の民に950年もの間、異教を捨てよう求め、彼らを唯一の神様を信じるという真実の道へと招きました。しかし人々は彼をからかい、あざけるばかりでした。ついには彼の妻が、夫を裏切って異教徒の仲間に加わったのです。ヌーフさまは800年間、彼の民に苦しめられました。

ある日神様は、天使ジブラーイール（ガブリエル）に命じ、ヌーフさまに船を造るよう伝えさせました。

そしてヌーフさまも船を造ったのです。神様は、全ての生き物を2匹ずつと、信者たち、そして妻以外のヌーフさまの家族を船に乗せるよう命じられました。ヌーフさまは人々に洪水のことを知らせ、警告しました。

しかし人々の態度は変わりませんでした。信者と動物たちは船に乗り込みました。そして必要なものが積み込まれていきました。信仰しなかった人々は全ておぼれ、ヌーフさまや信者たちにとっても

長く苦しい旅が続きました。

時と共に、食べ物不足してきました。人々は飢餓に直面していたのです。どの食べ物も、それ一品で何かを作るには十分ではありませんでした。ヌーフさまはすべての食品を集め、それらを混ぜておいしい食事を得たのです。

信者たちは飢餓を乗り越えて生き抜きました。まさにその次の日、水が引いたのです。

今日私たちは、ヌーフさまが用意されたこの時の食事を「ノアのブディング」と呼ぶのです。

^{*} Ibn Hanbal, Musnad, 1/86



愛は、人間が本来持っている特性です。愛すること、愛されることは人間にとって最も基本的なニーズです。しかし愛は、私たちにとっておそらく最大の喜びであると同時に、最大の悲しみとなる可能性を秘めたものでもあるのです。愛について考える時、私たちは次のように問わずにはいられません。「痛みを味わったり結果として苦しんだりすることなく、愛することはできるだろうか？」この文章では、この重要な問題への答えを見つけていきたいと思います。

愛は生来必要とされるものであり、私たちはおいしい食べ物や果物を愛します。私たちの両親、配偶者、子供たち、親友たち、仲間たちを愛します。信仰深い人々、預言者たち、聖人たちを、生命、若さを、春、美しいもの、そしてこの世界を愛します。これら全ての物事、人々が、一時的もしくは永久に消失することによって私たちを放棄すること、もしくは彼ら自体の苦しみ（例えば病気、死、加齢）によって私たちを苦しめることは私たちの心に影響を与えます。そして私たちはこう問わずにはいられないのです。

「私はこれらを愛することをやめられない。痛みを伴わずにこれらを愛することは出来ないのだろうか？」と。痛みのない愛の処方箋はないのでしょうか。

意志によって、愛はその顔を一つの対象から他のものへと向けなおすことがあります。例えば、最愛の人が若干の見苦しさを示したり、あるいは彼や彼女が真に愛されるべき存在のベール、もしくは鏡であることを示したりした時、愛はその顔を比喩的な意味の愛される存在から、真に愛される存在へと向けなおすことがあります。

痛みのない愛の処方箋

愛する人との別れ、最愛の人の衰え、あるいは愛する人からの反応が少ないことなどによって、愛は痛みを引き起こすことがあります。痛みを伴わない愛を経験するためには、私たちの愛情の対象が永遠であり、衰えることなく、また確実に反応をかえしてくれる存在である必要があります。神だけがその特質を持つのです。神は永遠で、衰えることなく、またいつでも私たちの愛に答えて下さるのです。

したがって痛みを伴わない愛の処方箋とは、私たちの愛を神に捧げることであり、そして神ゆえに全てを愛することなのです。人が、愛しているものを愛さなくなると予想するのは不合理です。しかし全能の主ゆえに、神の名において愛することは可能なのです。いくつかの例を考えていってみましょう。

おいしい食べ物に対する愛着

おいしい食べ物、果物に対する愛着は、それらを、全能で慈悲深い主の恩恵と見なすことによって、神への愛へと変化させることができるでしょう。それによって私たちのそれら食べ物に対する愛着は、

恩恵、慈悲、慈愛という神の美名への愛となるのです。さらに、それは感謝を引き起こします。そのような愛は許された範囲の中で満足を得ることを求めるもので、本来の魂ゆえでもあり、また慈悲深いアッラーの名ゆえでもあることを示します。それは熟考と感謝によって楽しむためのものなのです。

両親への愛

人の両親に対する愛情と尊敬は、慈しみのうちにあなたを彼らに任せ、優しく世話をさせ、彼らにあなたを育てさせた神の英知と慈悲ゆえに、全能なる神の愛と関係付けられるものです。この愛情、敬意と慈しみが神ゆえのものであるというしるしは、彼らが年をとり、色々なことができなくなって、困難な状況にある時、私たちが彼らに対しより優しく、親切に、いたわりを持って振舞えるということです。クルアーンの次の章句は、それを示しています。

「あなたの主は命じられる。かれの外何者をも崇拜してはならない。また両親に孝行しなさい。もし両親かまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて老齢に達しても、かれらに「ちえっ」とか荒い言葉を使わず、親切な言葉で話しなさい。」

両親に親切に接することは、それ以外にもクルアーンの多くの章で語られています。

神の唯一性と、いかなるものをも神に並べ置いてはいけないということはクルアーンの最も重要なメッセージです。クルアーンの4箇所において、両親に親切に接することが、この最も重要な原則の直後で命じられているのです。これは私たちの両親の権利がどれくらい重要か、彼らの恩を忘れることがどれくらい醜いことかを示すものです。

両親は、その子供達にとって最大の愛情と慈しみに値する存在です。父は誰よりも、自分自身よりも子供たちがよくなることを望みます。また子供たちは父に対して彼らの権利を主張することは出来ません。言い換えるなら、論争すべき理由は両親と子供たちの間には存在しないのです。論争の原因となる妬みは、父親の側にも子供達の側にも存在しないからです。または論争は、権利の濫用から生じるものであり、そして、子供たちは少しの権利も彼らの父に要求する立場にはないのです。

もし父親が自分の責任を果たさず、あるいは子供たちを虐待するようであれば、子供たちが父の振舞いを重んじると予想することは合理的ではないかもしれません。しかしこれは他の状況においての反抗を必要とするものではなく、また蔑視することを正当化するものでもありません。このような状況でも、子供たちは神によって承認された方法で父に従うことができ、そして父の為に祈ることが出来るのです。

母親はみな愛と敬意の最高の段階に値する存在です。認められた伝承において、預言者ムハンマドは次のようにおっしゃられています。「天国は母の足の下にある。」(アフマド・ナサーイ)

また別の伝承においても、次のような出来事が記されています。

一人の人が預言者ムハンマドのもとに来ていいます。「神の使徒よ、私の交友関係の中で最も尊いのは誰でしょうか。」預言者ムハンマドは答えられます。「あなたの母だ。」男が再度問います。「次には誰で

しょうか。」預言者ムハンマドは「あなたの母だ。」と答えられました。男はさらに尋ねます。「それから？」預言者ムハンマドは「あなたの母。」と答えられます。男はもう一度尋ねます。「それから？」預言者ムハンマドは答えていわれます。「それから、あなたの父だ。」(ブハーリー・ムスリム)

子供たちへの愛情



完全な慈しみと優しさを伴う子供への愛情と保護は、それを、慈悲深く寛大な神の贈物と見なすことによって神と結ばれます。彼らが死ぬ時、絶叫して泣き叫ぶのではなく、忍耐と感謝を示すことが、その愛が神ゆえのものであることのしるしとなります。そしてこのようにいうのです。「この子は創造主によって創造され、守られていた、愛らしい人だった。主は私にこの子をゆだねられていた。今、主の英知がそれを求めたため、この子は私から戻された。よりよいところへと……。私がもしこの子に、見

かけ上の一つの権利を持つのであれば、この子の創造主は千の、真の権利を持っているのだ。」

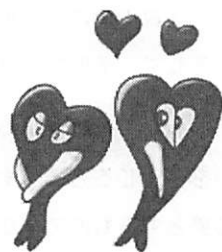
さらに、「全ての権限は、神にある。」ということによってその状況を甘受するのです。

友人に対する愛情

もし彼らが、その信念と善行がゆえに、全能なる神の友であるのなら、「アッラーゆえに愛しなさい。」という観点から、友人や仲間への愛も、神に結び付けられるものとなります。

配偶者への愛情

配偶者への愛情は、それが一時的な特質を条件にしない場合、神ゆえのものとなります。夫は妻を、慈悲深い神からの親しみやすく魅力的な贈物として愛します。彼は妻の肉体的な美ゆえに妻へ愛情を抱くのではないのです。それは見る間に衰えてしまうものです。女性の最も魅力的で快い美しさとは、その彼女独自の繊細さと優雅さを伴う、性質の素晴らしさなのです。



彼女の最も貴重ですてきな美しさとは、彼女の正直さ、誠実さ、高尚さ、そして明るいいたわりです。この美しい優しさとい性質は彼女の人生の最後まで続くもので、さらには増加さえするのです。弱く繊細な人の権利は、その愛によって保護されるのです。さもなくば、彼女の表面的なよさが衰える時、そして彼女が最も権利を必要としている時、彼女はその権利を失うでしょう。

同様に、妻は夫の見た目のよさ、強さ、富によって夫を愛するのではないのです。それらはほんの一時的なものです。その代わりに、彼女は天国の庭での永遠の仲間として、そして自分の時間、エネルギー、富を家族の幸福のために犠牲にする彼の、この世における慈しみ深い仲間として彼を愛するのです。

信心深い人々への愛情

主の最も尊いしもべとして、預言者たち、聖人たちを愛することは、神ゆえのもの、神の名ゆえのものです。その人々のためのものではないのです。こういう形である場合、この愛は神に結ばれます。神ゆえでないならば、その愛によって私たちは彼らをアイドルとしてしまうかもしれないのです。

生命と若さへの愛着

生命に対する私たちの愛着は、私たちがそれを、永遠の生を手にするための最も貴重な富、資本だと見なして愛し、保持するならば、神ゆえのものとなります。私たちは生命を、永遠の完全性を与える宝庫だと見なします。それは全能なる神が私たちとすべての人類に与えてくださったものです。私たちの時間を主への奉仕に費やす時、生命への愛着は真に崇拜されるべき存在へと結びつくのです。同様に若さへの愛着は、それを神からの素晴らしい、甘美な恩恵と見なすなら、痛みを伴わない愛情となります。そしてそれを、神の導きのもと、適性に用いるのです。

春、そしてこの世界への愛着

春への愛情は、私たちがそれを、熟考のうちに、全能なる主の輝かしい御名の、最も細やかな1ページ、最も美しい刻銘として愛するなら、神の美名への愛と変わります。この見方をとるなら、春は、全知の創造主の最高の芸術の、最もきれいに飾られた展示と見なされます。同様に、私たちがこの世を、来世のための耕地、そして神の美名を映す鏡、そして全能なる神の手紙として愛する時、この世への私たちの愛着は、アッラーゆえのものとなるのです。私たちはこの世を一時的なゲストハウスと見なします。そこで私たちは魂を訓練するのです。自分の肉体からの凶悪な命令と戦うことによって、より精神的に高い段階に達することが出来るように。

要するに、神ゆえに愛することは、この世とその住民を愛することを求めます。自分たち自身の為にあらずして愛するのではなく、自分たちを超越するものを示しているものとして愛するのです。美しい被造物を目にした時、私たちは「何と美しく創造されたのだろう。」といいます。「何と美しいのだろう。」という代わりに。

神ゆえの真実の愛着は、他の愛がその人の心の内側に入り込む機会を与えません。なぜなら心の内側は、永遠に懇願されるお方の鏡であり、そのお方のみを映すからです。この愛情は、次の祈りによって結晶化します。「神よ、あなたへの愛を私たちに与えてください。私たちがよりあなたへと近づけるものへの愛を与えてください。」

このような形を取る時、上に列挙したそれぞれのタイプの愛は痛みを伴わない喜びを与えます。そしてある点において、無限の一体化をもたらします。そしてそれは全ては私たちの神への愛を増させます。永遠なるお方との結びつきによって、このような形での愛情は感謝の思いとなり、純粋な喜びの源となります。

りんごの物語

それを与えてくださった存在の為に何かを愛すること、そしてそれ自身の為にのみ何かを愛することとの間の違いを理解する為に、次のような話を考えて見ましょう。

もし、強い王様があなたにりんごを一つ与えるなら、そこにはりんごへの二種類の愛情があり、二種類の喜びが存在するでしょう。

まず、あなたはそれが美しく、おいしいものであるという理由で、このりんごを愛するでしょう。この愛に結びついている喜びは固有のものであり、りんごの存在とのみ関わっています。この愛情は王とは関係ないものです。この種の愛を感じ、王の前でそのりんごを食べるなら、その人は王よりもむしろりんご自体と彼ら自身の魂を愛しているのです。王はこの種の、本能的な精神を培う愛を好まれません。それをひどく嫌われるのです。

さらに、りんごが与える喜びはとても限られた、刹那的なものとなります。それが食べられた後は、それがなくなったという悲しみのみが残ります。

しかし二番めの愛のタイプは、王の行為に感謝するものです。まるでそれが王の好意のサンプル、具体化であるかのように、りんごが何か貴重なものであると考える人々は、王への愛情を示します。そしてその果物、すなわち王の好意のいれものによる喜びは、千個のりんごが与えるものよりもはるかにおおいものです。この喜びはその時、感謝の精髓となり、そしてこの愛は王への敬愛なのです。

結論

私たちがそれらで自分たちと喜びのためのすべての気前のよさと果実がそれらがもたらす肉体的快楽でだけ好きであるなら、私たちの愛は単に自己の愛です。

もし私たちが、全ての恵みや果実をそれ自体のみのために、そしてそれらが与える物質的喜びのみのために愛するなら、私たちの愛は単にそれ自体にたいするものに過ぎません。このような喜びは一時的で、痛みを伴うものです。しかしもしそれらが、神の慈悲からなる好意として、神の気前のよさの果実として愛されているなら、それらはいつもその出自を私たちに思い起こさせるでしょう。

そこにおける神の好意や気前のよさに感謝し、喜びが得られるなら、それは感謝を意味し、同時に痛みのない喜びとなるでしょう。果物の味は消えるかもしれませんが。しかし果物という贈物を与えたお方は永遠です。最愛の人は死ぬかもしれませんが。しかし全ての存在の創造主、それらを生かされるお方は永遠です。見かけの美しさは衰えるかもしれませんが。しかし真の美の源は衰えないのです。

痛みのない愛の処方箋とは、一時的なものから私たちの愛を遠ざけ、それを永遠なる存在へとむけることなのです。そしてすべてをその存在ゆえに愛することです。13世紀のトルコの神秘的詩人ユヌス・エムレは、その詩で簡潔にこの認識を表現しています。

「私たちは、創造主ゆえに全ての創造されたものを愛する。」



年老いた人々へのメッセージ

12 番目の希望

ある時、イスパルタ地方のバルラ地区に、流罪という名目で、みじめな捕らわれの身となった、一人ぼっちで、孤独であり、村人たちと会うことも、話すことも禁じられていたし、さらに、病にかかり、年もとってしまい、故郷からのはるかに遠く、たいへん悲惨な状態でもあったとき、完全に慈悲深くあらせられる真の主によって、英知あるクルアーンの真意と秘密が、慰めの源となる一筋の光として、私に与えられた。それによって、その痛ましい、苦しい、悲しい私の状況を忘れるように努めた。

私の祖国、知り合い、親類たちを忘れることはできたが、残念ながら、たった一人を忘れ去ることはできなかった。彼は、私のいところでもあり、精神的には息子でもあり、もっとも犠牲心に富む私の教え子でもあり、もっとも勇敢な私の友人であった、故アブドゥラフマーンである。6、7年前、私と別れた。私の所在を、彼は知らなかったの、私のところへ、助けに駆けつけることも、私を慰めることもできなかった。又私も彼の状況を知らなかったの、彼と情報交換することもできなかったし、苦しみを分かちあうこともできなかった。私は年をとってしまったので、その状況では、献身的な、誠実な人が私には必要であった。

そのころ、突然、ある人が私に一通の手紙を手渡した。手紙を開き、中を見ると、そこにはアブドゥラフマーンの所在が明らかにされていた。その手紙の一部は、「27番目の手紙」の話の中に、明白な3つの奇跡の顕れとして記されている。その手紙は私をたいへん悲しませた。今でも、私を悲しませ続けている。故アブドゥラフマーンは、その手紙の中で、非常に真剣に、そして誠実に、この世の楽しみにうんざりし、彼の最大の望みは私の所へ来て、小さい頃私が彼を世話したように、私が老いたとき、彼が私の世話をすることであると書いていた。さらに、この世での私の真の役目であるクルアーンの神秘を伝え、広めるという目的を果たすため力強いペンによって私を助けることを望んでいた。その手紙の中にも、そのことが書かれていた。「20か30のリサーレ（便り）を私に送ってください。それぞれ、写しを20か30書き、他の人にもそれらを写させますから」と語っていた。

この世に対する力強い希望を、その手紙は私に与えてくれた。たいへん聡明で実の息子よりも忠実で親しみ深い息子が、私に奉仕してくれることを、そのたいへん勇敢な教え子を見出したので、悲惨な捕らわれの身であることも、故郷から遠く離れ、孤独であることも、私が年をとってしまったことも忘れてしまったほどである。

その手紙を書く前に、彼は来世への信仰（復活）について記された「10番目の言葉」の写しを手にしていた。まるで、その便り（リサーレ）は、彼にとって解毒剤となったので、彼の中で6、7年も痛

み続けていた精神的傷のすべてがいやされた。たいへん力強い輝く信仰と共に、死を待っているかのよう
に、その手紙を私に書いたのであった。1、2ヶ月後、かつてアブドゥルラフマーンと共に過ごした幸せ
なこの世の生活の考えていたとき、ああ、悲しいかな、彼の死の知らせを突然手にしたのである。この報
せは私をなんとも激しく震撼させた。そのため、この5年間ずっとそのおおいの中から抜け出せないで
いる。当時受けていた悲惨な捕虜生活、孤独さ異郷でのさびしさ、古い、病気などよりも10倍も深く、そ
れは私に悲嘆、悲痛、悲哀を感じさせた。私の母の死によって、私自身のこの世の個人的生活の半分が死
に、そして、アブドゥルラフマーンの死によって残りの半分も死んでしまったと私は感じた。この世との
つながりが一切なくなってしまった。なぜなら、彼がこの世に残っていたなら、私に代わりを完璧になし
とげる良き代理者となったであろう。又さらに、この世でもっとも献身的な慰めの源となる友人の1人と
なったであろうに。そして、もっとも聡明な私の弟子（教え子）、私の同行者、そして「光の書簡集」のも
っとも信頼できる所有者となり守護者となったであろうに。

さよう、人間として、このような消失は、私のような人間にとって、たいへん悲惨なことであった。
外見上、私がそれに耐えようと努力していたのは本当だが、私に心の中では激しい嵐がふきあれていた。
時々、クラーンの光による慰めが、私を静めてくれなかったなら、私は耐えることはできなかったであ
らう。その時バルラのいくつもの谷間や山々を1人で歩き回っていた。さびしい場所に座り込み、悲しみに
包まれて、かつてアブドゥルラフマーンのような誠実な教え子たちと共に過ごした幸せだった生活のひ
とこまひとこまを、映画の場面のように想像はしてみたが、古いと故郷から離れた寂しさが与える苦しみ
は、私の抵抗を打ち砕いてしまった。と、突然、

「彼のお願いの他、よろずのものは消滅する。判決はかれに属し、なんじらはすべてかれに帰される
のである。」(28/88) という聖なる神秘が明かされた。

私に「おお、永遠なるアッラー、あなたこそは永遠であらせられる。」「おお永遠なるアッラー、あ
なたこそは永遠であらせられる。」と唱えさせた。そして、それによって、真の慰安を私は得たのであった。

さよう、そのさびしい谷で、悲しみにうずくまっている時、この聖なる節の神秘を通して、預言者
の言動に従う道について便り（リサーレ）の中で示されたように、私自身が巨大な3つの遺体の前に在る
のに私は気付いた。

その1つは、私の55歳までの人生において、55回死んだサイドの遺体が、埋められた墓上の
墓石で、それが私自身であると気付いた。

2つ目の遺体は、聖アーダム（彼に平安あれ）からずっと今まで、この世を去っていった各時代に
埋められた同胞たちの巨大な遺体である。その遺体の顔の上で、墓石という今世紀の表面をさまよいる
く、ありのような小さな生きものが、私自身であると感じた。

3つ目の遺体は巨大な世界である。人間が毎年地上で死を繰り返し、その上を移動している。この
世界の死から推測すると、巨大な世界もまた、上記の節の神秘からも分かるように、消滅するであろうこ

とを、私は想像し現実のもととして感じた。

さよう、アブドゥラフマーンの死の悲しみから沸き起こってくる恐ろしい考えを明るく輝かせ、真の慰めと永遠の光を与えるこの節が暗示によって援助にかけつけた。

それゆえ、彼らがそむき去っても言え「わたしにはアッラーがいませば十分だ。彼のほかに神はないのである。彼にわたしは信頼し奉る。彼こそは、栄光にみちた至高の玉座の主である」(9/129)

さよう、この節が私に教えてくれたように、真の主は存在する。彼はすべてのものに値する。彼は永遠である。さよう、彼のみで十分である。たった一度の彼の恩寵の顕現は、世界のすべてに値する。そしてたった一筋の光は、その3つの巨大な死体に、精神的世界を与える。それらは死体ではなく、役目を終え、別の世界へ移動したことを示している。「3番目の光」で、この秘密を明らかにしたので、十分であると思われるので、ここでは、ただ私は

「かれのお願いの他、よろずのものは消滅する。」(28/88)の節の意味を示そう。

「ヤーバーキー アンタルバーキー」「ヤーバーキー アンタルバーキー」と2度唱えるのみである。それが、たいへん苦悩に満ちた悲しみの淵をさまよっていた私を救ったのである。

その次第は以下のようである。

私は一度「ヤーバーキー アンタルバーキー」と唱えた。この世を去ることと、この世でアブドゥラフマーンのように、たいへん愛着を感じていた知人達が去り、そのつながりが絶たれたことによって生ずる、限りなく深い精神的傷が、外科的手術をしたかのように治り始めた。

2度めの「ヤーバーキー アンタルバーキー」の文は、この限りなく深い精神的傷にとって、膏藥ともなり、解毒剤ともなった。

つまり、「あなたは永遠であられます。去るものは去ればよし。あなたは十分なお方であられます。あなたは永遠であられ、消滅するものすべてに値するひとかけらの慈悲を示されるだけで十分であります。あなたがいらっしゃる信仰によってあなたの存在に結びつくことを知るものや、イスラームの真実を通して、そのつながりを大切に行動するものにとって、あらゆるものが存在するのです。無常、消滅、死と無は、ある種の覆いであり、新生されるものです。まるで異なる様々な世界を旅しているかのようです。」と考えると、完全にその痛み、悲しみ、悲嘆、暗闇、恐れ、別離などを感じていた私の心は、幸せ、喜び、楽しみ、光、愛らしさ、親しみを感じる状態へと変化した。私の舌と心、さらに体に配置された全ての原子(粒子)が、一斉に「アルハムドリッラー」と唱えていた。

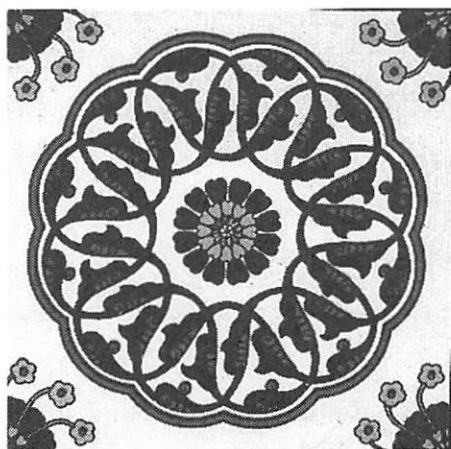
さよう、その慈悲の顕現の1000のうち1つの列は次の通りである。私はそのさびしい谷から悲しく憂鬱な気持ちで、バルラにもどった。ふと気づくと、クレオンル ムスタファと名乗る若者が、私に礼拝と清浄について、2、3質問するために、私を訪ねていた。その時間帯は、客を受け付けていなかったのだが、彼の魂に恵心さを感じ、将来「光の書簡集」になすであろう価値ある奉仕を、おそらく予感し

たのだらう。私の心は、彼の心を読んだ。そのため、彼を追い返さず、受け入れたのである。その後、明らかになったことだが、「光の書簡集」への奉仕において、私の後、善き代理人として、真の相続人の役割を完璧になしとげたであろうアブドゥラフマーンの代わりに、真の主はムスタファを例として、私にお送りくださった。「あなたから。アブドゥラフマーンを私は奪った。そのかわりに、今、あなたの会ったムスタファのように、あなたに30人ものアブドゥラフマーンを与えよう。彼はイスラームの教えの義務を果たす、学徒でもあり、いどこでもあり、精神的息子でもあり、兄弟でもあり、献身的な友人でもあった。」

そして、そのように、リッターヒルハムド（アッラーに讃えあれ）30人のアブドゥラフマーンを私に授けてくださった。その時私は言った。「なげき悲しむ私の心よ。このような例をあなたは知った。そして、それによって、あなたの心の傷のもっとも重大だと思われる部分を治してくれた。他のあなたを悩ます傷もいやさだらう事は確かだ。」と。

さよう、私のように年をとり、こよなく愛した息子や親類を失い、腰の痛みのような老いの重荷と共に、別離の悲しみで、頭を悩めるご老人たち、そしてご老婦達よ。私の状況をごらん下さい。あなた方の痛みが深いことをお察し申し上げるが、これらのクルアーンの諸説が治療し、治してくださった。さよう、英知なるクルアーンの聖なる薬局には、あなたがた1人1人の苦しみを治す薬がある。もし信仰によって、それを願い、崇拜行為によって、それらの薬を使うならば、あなたがたの腰と頭の痛みと老いと悲しみの重荷を軽減できるであらう。

長くこの部分を書いた理由は、故アブドゥラフマーンのために、より多く慈悲を請う祈りをしていただきなかったからで、どうか、あなた方がうんざりなさらないことを願っている。さらに、非常に不愉快で、痛々しい方法で、過度にあなた方を困惑させ、嫌気がさし叫びだすであろうもっとも恐ろしい私の傷を、あなた方に示した目的は、英知あるクルアーンの聖なる解毒剤が、たいへんすばらしい薬、そして輝く光であるということを示すことであつた。



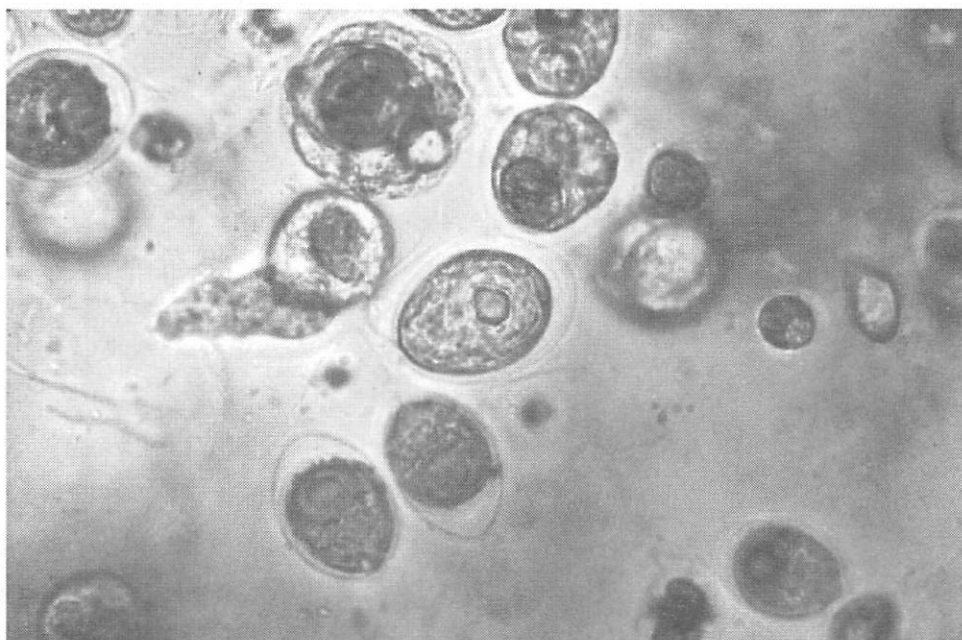


プランクトン～食物連鎖の基盤

By KAYA Zubeyr ,The fountain

歴史を通し、多くの作家にとって宗教は最も興味あるテーマでした。世界の創造や神の存在について書かれている書物は多くあります。自然と自然界の生物は、その不思議な力によって神の存在への理解に貢献するものであり、しばしば研究のテーマにされてきました。水中生物は驚異の存在とされる種の一つで、これまで多くの人々の関心を集めてきました。クジラ、サメ、ウミガメやその他の大きな魚が主にその対象でしたが、最近の研究は水中の小さな生物についての関心を集めました。海中の小さな被造物について様々な事柄が理解されるにしたがって、神の偉大な力が明らかにされていきます。

水中の、小さな、不思議なこの被造物は、プランクトンと呼ばれます。受動的に浮いているのみ、あるいはわずかに動いているのみの動植物がこれに含まれます。プランクトンという言葉はギリシア語の「漂う」という単語から来ているものです。海に漂うプランクトンは、この星で最も数の多い生物の一つです。ボールにほんの一杯の海水には、この小さな有機体が100万も存在しています。プランクトンは肉眼で見えることは出来ません。これらの被造物を知る唯一の方法は、それらを見つけ、顕微鏡の助けを借りて観察することです。多くの海洋動植物は、そのライフステージでプランクトンである段階を通過します。しかし多くはその後、より大きく育つのです。この種の生物は周期性（一時性）プランクトンと呼ばれます。終生プランクトンとは、これらとは異なり、生涯をプランクトンとして生きる小さな被造物を意味します。



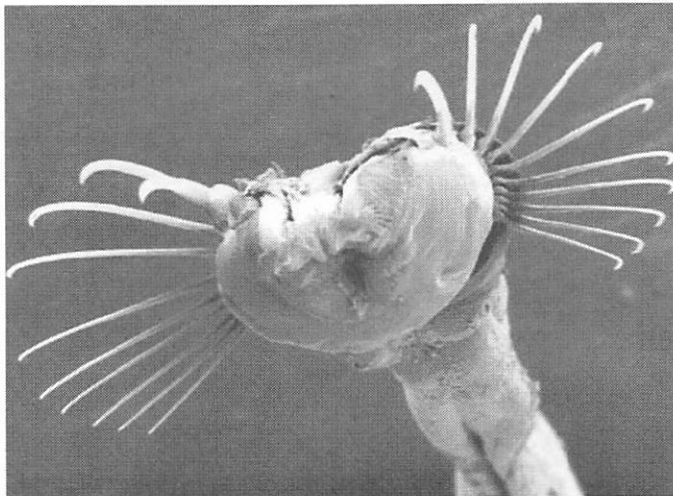
プランクトンは植物性・動物性とも分類されます。Phytoplankton は植物プランクトンの学名であり、zooplankton は動物プランクトンについて用いられる名称です。通常、植物プランクトンは動物プランクトンより小さく、顕微鏡でさえそれらの観察を行なうのは困難です。海の世界連鎖の大部分は、植物プランクトンを出発点とします。これらは動物プランクトンによって食べられ、この小さな動物プランクトンはより大きな動物に食べられます。サメやシロナガスクジラに至るまで、順にこの連鎖が続いていくのです。

プランクトンは大部分の世界連鎖の基盤を構成するものであり、プランクトンへ与えられるダメージは他の多くの生物に影響を与え得るものです。多数のプランクトンを失うことは、大部分のオキアミに影響を及ぼすでしょう。そしてオキアミはクジラの主要な食物なのです。植物プランクトンは人間が吸う酸素を生産しており、植物プランクトンの数の減少は人間に影響を及ぼすかもしれません。汚染、特に化学的汚染物質による汚染は、海面のプランクトンに直接的な影響を与えるでしょう。これはプランクトンの数に対する重大な脅威となります。

またプランクトンは、世界連鎖における役割によってのみ重要なものではありません。プランクトンは有益な鉱物を生産するものとしても重要性を持ちます。海底に埋まり、後に採掘された古代のプランクトンは、石油、頁岩、その他貴重な鉱物の源となったのです。

地上の植物と同様、植物プランクトンは光合成によって二酸化炭素を吸着、固定し、より高い栄養レベルで使用できるようにします。植物プランクトンの成長に影響する主要な環境要因は、温度、光、そして養分をどれだけ得ることが出来るか、という点です。過剰な栄養分の影響で水温が上がると、植物プランクトンは急速に数を増し、赤潮（有害藻類ブルーム）が発生します。これは海に被害を及ぼすものとなります。赤潮が発生すると、多くのプランクトンは死んで、海底に沈み、そこで分解されます。これは海底の溶存酸素濃度の低下をもたらします。この溶存酸素濃度は、魚やカニなど、他の有機体の生存のために不可欠なものなのです。

主要な植物プランクトンは、ケイ藻、黄金鞭毛藻類、緑藻、褐藻類、双鞭毛藻類、クリプト藻など



です。これらは栄養分のレベルや水質状況の変化に敏感であり、そのため植物プランクトンは海中の環境状況の指標として用いられます。

動物プランクトンは、微細なワムシ類から肉眼で見えるクラゲまで、様々な大きさを持つ浮遊性の動物を意味します。海中でのこれらの分布は、塩分、温度、そして食物によって決定されます。

動物プランクトンの種は、一次消費者（植物プランクトンを食する）と二次消費者（他の動物プランクトンを食する）の二つで構成されます。

動物プランクトンは、三段階の大きさに分類されます。マイクロ動物プランクトンは原生動物やワムシ類、メソ動物プランクトンはカイアシ類、無脊椎幼生、マクロ動物プランクトンは端脚目の動物や魚の幼生、エビ、クラゲなどを含みます。これらも水質の変化に敏感であり、海中の環境状況の優れた指標となっています。

プランクトンの中で最も多いのが、カイアシ類です。カイアシ類には7500以上の種があります。これは小さなエビのような動物です。カイアシ類は動くために櫂のような付属器官を持ちます。彼らはケイ藻などの他のプランクトンを食べ、より大きいプランクトンによって食べられます。一つのカイアシ類は日に平均20万のケイ藻を食べることができます。

端脚目の動物は、コクジラの主要な食物であり、エビと等脚類の中間のように見えます。端脚目の動物は主に2ミリから50ミリの範囲内に含まれますが、いくつかはより大きいサイズを持ちます。端脚目の動物は世界の多くの部分において、水中の生態系でよく見られます。海、汽水域、そして淡水中に住みます。いくつかの種は、地上の生態系にも存在します。

最も興味深いプランクトンの一つが、フジツボです。それは、満潮時にのみ水が来る地帯に住んでいます。一見するとそれは軟体動物のように見えます。しかしフジツボの幼虫を観察するなら、事実が明らかとなります。フジツボは船体やブイに深刻な問題を引き起こします。

クラゲは、基本的に長い触手と大きな胃のみでできていて、プランクトンでもあります。彼らが獲物を捕らえ、麻痺させ、食べるために用いるその触手には針があります。彼らは胃をポンプのように用い、水中を動きます。多くの場合、流れに身を任せて左右に移動します。

カイアシ類、端脚目の動物、フジツボやクラゲは、プランクトンの中で最も数も多く、よく知られているものたちです。海は、この小さな有機体の世界を内包しているのです。そのほとんどは人間の目には見えず、しかしそれらは、海中のほとんどの生命の基礎なのです。これらの小さな存在を知ることは、神の特質とその偉大さへの私たちの認識を高めます。海の神秘について知れば知るほど、私たちは神の存在を信じるようになるのです。





感謝しない人間

By Ishrat J. Romy

ある日、一人の男が木に登った。

木のとっぺんまで登ったとき、とつぜん強い風が吹きはじめた。

あまりのこわさにしんぞうが口から飛び出しそうだった。男は顔を空にむけて言った、

「おお、いだいなる神よ！私をぶじ下までおろしてくださったら、私のひつじをすべてあなたにささげましょう！」

「おや、風がだんだんやんできたではないか。。。神よ！風がやんできたので、ひつじではなくよう毛をささげましょう。。。はてさて、風がどんどん弱くなっていくぞ。。。神よ！では私がぶじにむきずで地にたどりつけたら、ひつじの乳をささげましょう。」

「おお、あの強い風がそよ風変わったではないか、下までぶじたどりつけたぞ。」

「さっきまでおれは何を言っていたんだ？。。。ひつじ、よう毛、ひつじの乳？乳？よう毛？だれがそんなぜんぶをあげられるか！おれもばかな事をいったもんだ。」





『THE 有頂天ホテル』

「嘘には、良い嘘と悪い嘘がある」

よく聴く言葉です。一般的に「事実でない事、本当でない事」を嘘とって、人を騙して利益を得ようとしたり、虚栄心を満足させるためだったり、悪いことを隠そうとしたりしてつくものです。しかし、嘘は必ずしも悪い事だけのために使われるわけではなく、本当のことを伝えることだけが優しさでない場合にも使われます。致命的な事実、知らないほうが幸せな事、人間関係の上でつかなければならぬ嘘や隠し事もさまざまにあると思います。

ですが、嘘はいつかは誰かにバレるもの。今回は様々な嘘が更なる嘘を呼び、嘘が喜劇を呼ぶ映画をご紹介します。

大晦日のカウントダウン・パーティを2時間後に控えたホテル・アヴァンティ。副支配人はアシスタント・マネージャーと共にホテル内で次々と起こるトラブルを手際よく解決していくが、段々と何かはずれはじめ、大きなトラブルへと発展していく。



その時ホテルに存在しているのは、汚職事件でマスコミを賑わす政治家、その元恋人の客室係、愛人に会いにきた富豪、マン・オブ・ザ・イヤー受賞者、どこにでも現れるコールガール、ホテル内で迷子になった総支配人、夢破れ故郷へ帰る予定のベルボーイ、死にたがる大物演歌歌手、パーティ出演予定の芸人、そこから逃げたアヒル、それを追いかけるホテル探偵、制服を盗まれたスチュワーデス……人々が複雑に絡み合い、トラブルが膨らんでいく…。

ここには有名な俳優・タレントばかりを使っているのにそこが強調されず、うまいこと馴染んで主役が誰とも言えず、まさに「グランド・ホテル」形式(限られた時間と場所で繰り広げられる群像劇を複数のスター俳優を起用して描く)の、三谷幸喜お得意のドタバタ劇です。それもそのはず、タイトルはいずれも名作の『グランド・ホテル』(1932

年:グレッタ・ガルボ主演)と『有頂天時代(後に「スウィング・タイム」と改名)』(1936年:フレッド・アステア主演)を混ぜたものだそうです。骨子が『グランド・ホテル』なら、内容はダンスとラブロマンス抜きで軽妙洒脱な雰囲気を残した『有頂天時代』といったところでしょうか。どちらもとても素敵な映画ですのでおすすめですが、話を『THE 有頂天ホテル』に戻しましょう。

ここには様々な嘘が出てきます。

- ・ 品行方正なマン・オブ・ザ・イヤー受賞者が、コールガールとの関係を隠すための嘘。
- ・ 副支配人が元妻にばったり会って、自分を「夢を実現させた男」に見せようとする嘘。
- ・ 政治家が自分を格好よく見せようと、虚栄をはって自分に対してつく嘘。
- ・ 客室で遊んでいて富豪の愛人と間違えられた客室係が、とっさに愛人を演じてつく嘘。
- ・ 夢を捨てようとしているベルボーイを励ますために、幼馴染がつく嘘。

とにかく、登場人物の一人がちょっとした嘘をつく、それが雪ダルマ式にふくれあがり、収集がつかなくなるほどややこしくなっていきます。はじめはありがちな嘘だったのに…。そして、登場したどの嘘も、別の人を呼び、迷惑を呼び、結果として喜劇を呼びます。当人は嘘に巻き込まれて必死だったり、捨て身だったりするのに、観客である第三者の目から全体を見渡すことも滑稽なものになってしまうんだな、と考えると、現実世界でも嘘をつき、それを重ねていくのがなんだかおかしなものに思えます。

三谷幸喜は作品のオフィシャルサイトで、この映画の企画意図を以下のように語っています。

「それぞれのエピソードの主人公達は、その夜、一生に一度の体験をします。それはひよっとすると、彼女が、彼女が、生涯で最も輝いた瞬間だったかもしれません。しかしそういうときに限って、誰も見てくれない。人生なんて、だいたいそんなものです。でも、ひよっとすると、そう思っているのは自分だけかもしれない。実はちゃんと誰かが見ているかもしれない。それはたまたま近くにいた人かもしれないし、もしかしたら自分の一番大事な人かもしれない。ひよっとしたら運命をつかさどる「神様」かも。そう思えば、少しだけ生きることが楽しくなってくる、そんな気にさせる映画です。」

登場人物たちが一番輝いた瞬間というのがどこかは映画を見てもらうとして、嘘も、誰も見ていない、誰も気づかないと思っけていても、必ず誰か見ている者、真実を知る者がいるはずです。

この映画に出てくる嘘は、少なくとも、人を騙して何かしようとかそういう悪い意図でつかれるものではありません。それでは善意の嘘、良い嘘なのかといわれれば違うような気もしますが、自分を大きく見せようとか、よく見せようとか、そういう誰しもが持つであろうちょっとしたことだったり、うっかり出てきてしまった嘘だったりするのでしょう。しかし、すべての嘘は重ねられるうちに必ず暴露され、ついた当人の恥ずかしさや情けなさ、惨めさはピークに達しますが、そこで何か失うわけではなく、むしろ周囲の人々に暖かに迎え入れられて得られるもののほうが大きかった

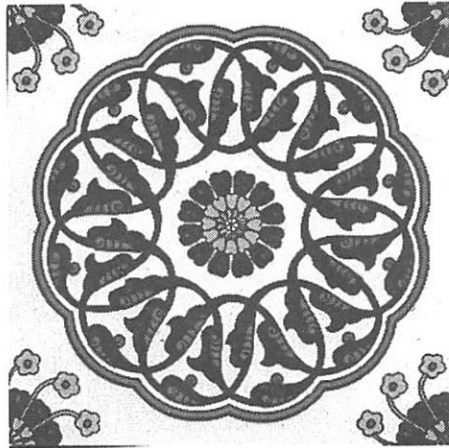
ります。災い転じて福と成す、とてもいいでしょうか。現実でも、こういう人達に囲まれていたいものです。

ほのぼのした中にも様々な感情が詰まっており、「こんなに都合よく物事は運ばないけれど、私もがんばってみようかな」と思える映画になっています。新しいことが始まりそうなこの季節、是非ご覧になって、明日への英気を養っていただければと思います。

『THE 有頂天ホテル』 2006年 日本 136分

監督：三谷幸喜

出演：役所公司(副支配人)／佐藤浩市(武藤田議員)／松たか子(客室係)／篠原涼子(コールガール)
他





日本には「嘘も方便」「ばか正直」というような言葉があるように「嘘」をつくことも時には必要であるという考え方があります。私もなんの躊躇もなく小さい嘘をいくつもついていた。悪気もなく、時には嘘をつくことも必要だと考えていました。私がイスラームを信仰し始めていろいろ学ぶ中で、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の性質のなかにとても誠実であったという話がありました。嘘をつかず正直者であることは時にはとても難しいことがあります。嘘をついてしまえばすんなり話が進むこともありますし、嘘をついてしまえば自分が楽になることもあります。私もずっとそう考えていましたが、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がどんなに正直であったか、また誠実な人であったかという話を聞くと私もこうなりたいたいと考えるようになりました。

この前友達に贈り物をする機会がありました。その時に「中に手紙がはいっていますか？」と聞かれました。私は直ぐに答えることができずに（手紙が中に入っていると高くなるのかな？）と考えていました。すると脇から直ぐに主人が「入っています。」と答えました。この時私はすごく恥ずかしい思いをしました。その時は一瞬でしたが、もし手紙が入っていないと答えたら少し安くなるのかな。と考えていました。なんて小さい心なのだろう、誠実でないな。なんだか自分がとても惨めになりました。小さな出来事でしたが、その日から今までそのことが心に残っています。小さなことでも常に誠実でいたいと思い直しました。

誠実な人が一度でも不誠実なことをするとその人が誠実な人に見えなくなってしまいます。だから人は常に誠実であるべきなのでしょう。子供を授かった今、親の立場として自分のできない事や、自分のしていないことを子供に教えることはとても難しいことです。親が嘘をつくのには子供に嘘をつくのはよしなさいとは恥ずかしくて言えません。子供のためにも意識して常に誠実でありたいと思います。

嘘をつくことは簡単ですが、信用を取り戻す事は簡単ではありません。一度ついてしまった嘘は一人歩きしてしまいます。常に誠実であることは難しいことかもしれませんが、より誠実な人間になれるように努力したいです。この世での人生が終わりになる時に自分が不誠実であったと思うととても気分が悪くなります。少しでも誠実な人間に近づけるように心がけたいと思います。

購読価格（郵送料込み） バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号: 00100-6-354012 口座名義: 月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号: 630（春日部）口座番号: 1134374 口座名義: 月刊誌やすらぎ

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com>

info@yasuragiweb.com

yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部